学生大使　実施報告書

氏名：平子舞夏
学部・学科（コース）・学年：地域教育文化学部・２年
派遣先大学：ガジャマダ大学
派遣期間：2023 年 8 月 29 日～2023 年 9 月 13 日

１　日本語教室での活動内容

平日は 10:00～11:30 と 13:30～15:00 の１日２回、日本語教室で日本語の授業を行った。

初級の学生とは、よく使うあいさつの練習をしたり、一緒に自己紹介を考えたり、ひらがなの読み・書きの練習をしたりした。自己紹介を何度も何度も繰り返して練習をしたり、新しく覚えた日本語を嬉しそうに使ったりして、次の日に会うと「昨日教えてくれた日本語覚えているよ！」と言わんばかりに日本語のフレーズを使って話しかけてくれた。彼らの学習意欲の高さと容量の良さには驚かされた。

上級の学生とは、日本の好きなアニメやアーティストについて話をしたり、ことわざかるたを使ってことわざを教えたりした。ことわざの意味を教えると「似たことわざがインドネシアにもあるよ」と教えてくれたり、インドネシアにはないことわざに対しては日本人ならではの感性を興味深そうに受け入れたりしていた。ことわざには難しい言葉が多々あったが、意味を理解できた人が他の人に伝えてくれたりなどして、日本語、英語、インドネシア語を使いながらみんなで協力して日本語の理解を深めることができた。

日本語の細かい表現の違いに苦戦しながらも、目を輝かせながら楽しそうに学んでいる姿が印象的で、日本語教室を楽しみにしてくれていたことが伝わってきた。そんな彼らと日本語を通してコミュニケーションを取れたことは、とても充実した時間だったと感じる。

２　日本語教室以外での交流活動

日本語教室の後は、サポーターの方や授業を通して仲良くなった学生と交流を深めた。学生にヒジャブやジャワ島の伝統的な衣装を借りて着てみたり、日本から持って行った浴衣を現地の学生に着付けたりして、日本語教室以外でも文化交流を行ったことはとても印象深かった。

また、ガジャマダ大学のプログラムである「インドネシアのプランテーション実習」にも参加させていただき、茶とカカオのプランテーションに訪れたり、日本語教室では関わることのできないガジャマダ大生と交流したりすることができた。お茶やチョコレートは普段よく口にするものだが、実際にカカオを見たことはなく、加工の流れも知らなかった。しかし、プランテーションでは発酵・乾燥段階のカカオを味見するなどして、現地の人から学び、実際に自分の五感で感じることができたのはとても貴重な体験となった。

３　参加目標への達成度と努力した内容

今回の参加目標として、2 つの目標を設定していた。

1 つ目は､1 人ひとりに寄り添うことを大切にしながら日本語や日本の文化を伝えることであった。過去に、約 20 人～30 人のクラスで日本語や日本の文化を教えたことがある。しかし今回は山大生 1 人に対して、ガジャマダ大生が 1～3 人だったため、一人ひとりの日本語レベルに合わせて授業を行ったり、相手が一番興味のある事柄について日本人だからこそ教えられることを伝えたいと考えていた。実際にガジャマダ大生とコミュニケーションをとってみると、彼らの日本に対する関心はとても深く、お互いに好きなものを語り合いながら、日本の文化を共有することができた。毎回の授業が一人ひとりのニーズや関心にあった内容で、日本にさらに興味をもってもらえる有意義な時間にできたと感じる。

2 つ目は、異なる文化で暮らす人々の人間性や価値観に触れ、理解することで、自分の知見を広げることであった。まず、私はイスラム教徒の暮らしに興味があった。宗教的行動は、その宗教を信仰している誰もが同じように守らなければいけないものだと思い込んでいた。しかし実際は、人によって信仰の仕方や度合いは違く、1 人ひとりが自分の大切にしたいことを大切にしていたことが印象的であった。また、インドネシア人はコミュニケーションが開放的で、相手が初対面のインドネシア人でも日本人でも分け隔てなくコミュニケーションをとっていると感じた。宗教の考え方や開放的なコミュニケーションといった異なる価値観に触れ、自分の知見が広がったと感じる。

４　プログラムに参加した感想

今回私は、2 回目の学生大使であった。2 回目の参加で改めて気づかされたことは、最終的に自分が最も関心を寄せるのは、自国である日本のことであるということだ。日本語を学ぶ学生は、どんなに些細なことでも積極的に質問をしてくれる。助詞の「は」と「が」の違い、なぜひらがな表の「や」「ゆ」「よ」の間には空欄があるのか…。改めて質問されると、確かになぜだろうと考えることもあるし、上手く説明できないことの方多い。母国語のはずなのに上手く説明できないもどかしさを感じた。

日本語には細かいニュアンスの違いがあるため難しさもあるが、相手を立てるような日本人らしい奥深さもある。そして、日本には数えきれないくらい素晴らしい文化があるのだと今回の日本語教室を通して感じた。それが日本について学ぶ面白さであり、日本語教室で彼らが目を輝かせていた理由だと思う。彼らが日本に興味を持ち、興味を持ったことに対して目を輝かせながら愚直に取り組む姿勢には感銘を受けた。私も彼らのように、学びに対して貪欲になりたいと感じた。

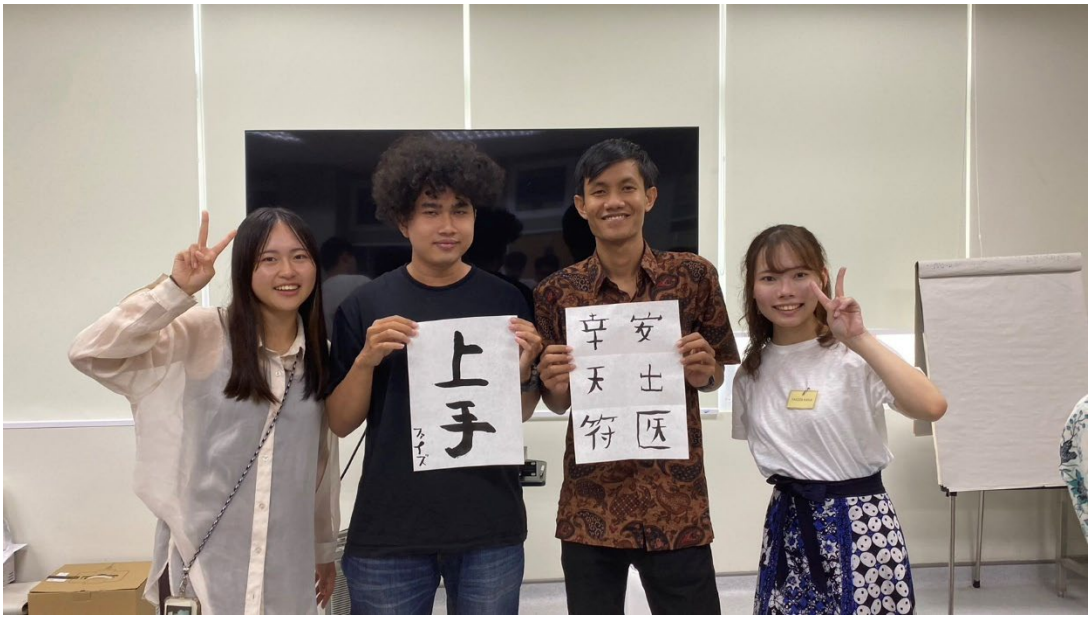
５　今回の経験を踏まえた今後の展望

私は教育学部に所属しているため、人に何かを教えたり、伝えたりすることは今後も挑戦していきたいと考える。そのために、今回感じた「実際にそれを使えること」と「それを人に教えられること」は違うということを心にとめておきたい。人に何かを教えるためには、なんとなくできるのではなく、言語化して相手に伝える力が必要であり、その能力が自分には足りていないことを痛感した。この学びを日々の生活や大学での学びで意識し、改善することで、自分の将来のスキルアップ

に繋がると確信している。

　最後に、今回サポートしてくださった現地のみなさま本当にありがとうございました。

茶のプランテーションに訪れたとき



日本語教室で行った書道